

ボルネオ北東岸地方におけるイスラーム受容をめぐる

—JAMS 関東地区 11 月の研究会から—

高野さやか

2003 年 11 月 28 日に開かれた JAMS 関東地区の研究会では、神田外国語大学の奥島美夏氏による報告「ボルネオ北東岸地方のアラブ人：イスラーム受容とのかかわりから」が行われた。イスラーム化が遅れ現地スルタンたちの権力が弱かったために英蘭植民地時代後期まで海賊や首狩りがはびこっていたとされる当地の地方史観を見なおすとともに、東南アジアにおけるイスラーム受容をよりダイナミックなものとして捉えなおそうとする奥島氏の試みは、*JAMS News* 27 号掲載の「ブルンガン王国のアラブ人移民」の問題関心を引き継ぐものであるため、史料や伝承に関する詳細はそちらをご参照いただきたい。以下では報告内容の概要を追うこととする。

氏はまず、近年さかんになっているアラブ人の東南アジア進出に関する研究は、その大半を占めたハドラマウト人を対象とするもの、またそのネットワークや東南アジアのイスラーム受容との関わりから論じたものに集中していることを指摘し、自身の調査結果から 2 つの論点を提示する。

第一に、ボルネオ北東岸地域(インドネシア・東カリマンタン州～マレーシア・サバ州)におけるアラブ人の移住には、18 世紀以降東南アジアに大量に流出したハドラマウト人と、それ以前の多様な出身地域や渡来目的をもったアラブ人による、少なくとも 2 段階の時期がある。第二に、これらのアラブ人は直接的・間接的にイスラームの普及に関係していたにもかかわらず、当地のイスラ

ーム化を大々的に推進したのは 19 世紀末からの反植民地政府運動や民族主義の潮流であったこと、である。これらの面に注目することによって、イスラーム化の直線的進行ではなく、浸透・後退を繰り返す立体的様態を論じることができる。おもな分析対象は、17 世紀末にボルネオ北東岸に成立したブルンガン王国に関する史料・伝承である。

1. アラブ移民の多様性

(1) 伝承前期の移民・来訪者(16～18 世紀):多様なアラブ氏族

16 世紀から 18 世紀の移民・来訪者は、伝承によれば、おもにハドラマウト以外の地域(イラク、リビアなど)から、マラッカなどの交易中継地をへて来島したといわれる。例えば、ブルンガン最古の氏族のひとつといわれる al-Magribi を名乗るスルー系アラブ人は、古文書によると 1530～50 年ごろブルンガン王国を統治していた。ハドラマウト人でも特権階層サイドや知識人は 18 世紀以前からインドやジャワへ進出しているが、少なくともブルンガンのアラブ人移民の中には様々なアラブ氏族が含まれているのである。

(2) 伝承後期の移民(18 世紀～):おもにハドラマウト系民

これに対して 18 世紀以降の移民はハドラマウト系が中心で、グジャラートなどから主に交易目的でやってきたといわれる。コーランが読める、ジ

ヤウィが書けるなどの理由で、宗教的な役割も直接・間接的に期待されることが多かった。今日「ブルンガンの 7 つのアラブ氏族」といわれる当地の代表的氏族名も、現地に定住した人数の多いハドラマウト系氏族をさすことが多い。また、伝承初期のアラブ人はこれら後期のアラブ人を敵とみなして恐れ、接触を避けていたという説もある。

(3) 今日のアラブ人社会

若干のアラビア語彙は残っているが、かつてのアラブ村のようなコミュニティの境界は薄れており、またアラブ人としてのみでなく、現地マレーや少数民族としてのアイデンティティをもあわせもつ。一方、アラブ人としての記憶には、マレーないし中国人などに対するアラブ人といった二項対立的図式ではなく、アラブ人といっても氏族・起源地・生業などは多様であるという自己認識が存在する。ここには伝承などにみたくつてのアラブ人の移住の諸相が反映されているようだ。

2. ボルネオ北東岸にみるイスラーム化の過程

(1) イスラームの受容と浸透のズレ

当地域と近隣スルタネイト諸国やアラブ人との接触は 16 世紀には始まっており、これを通じて、少なくとも王族や地方首長には宗教・教養文化としてのイスラームが普及してゆく。マッカ(メッカ)巡礼などもすでにこの当時から行われていた。しかしその反面、ムスリムとしてのアイデンティティの確立やイスラーム主義の強調は、反植民地運動が起こる 19 世紀後半から生じる。

このタイムラグの背景として、北東岸地域における政体の構造変化がある。たとえばブルンガン王国は、かつてのように沿岸の小島を拠点とするかわりに内陸に拠点を移し、内陸民との同盟を

強化して林産物資源を直接コントロールすることで繁栄し、島嶼部ベースのライバル諸王国(スールー、ブラウ、タラカンなど)をしりぞけた。こうした状況下では、対外的にはイスラーム王国であることを主張しつつも、内政においては非ムスリムとの協調が重要視されたのである。

(2) 反植民地運動としてのイスラーム

しかし、19 世紀後半にオランダ・イギリスの植民地統治が開始されると、王族の派閥争いや後継者問題への干渉、つばめの巣などの林産物交易への直接介入、ムスリムへの弾圧などが行われる。こうした内政干渉は地域住民の反感を強め、イスラームへの傾倒を促すことになる。20 世紀以降、英領側ではムスリム勢力による反乱が次々と勃発し、また蘭領でもイスラーム同盟(Syarikat Islam)やムハマディア(Muhammadiyah)などのイスラーム組織によって、バンジャルマシンなどの近隣諸地域にマドラサが多数設立される。当地におけるイスラームは、受動的ないしサロンの受容にとどまらず、一般大衆をもふくめた政治運動として急激に広がってゆく。

(3) 王族/民衆のイスラーム化

ボルネオ北東岸地域の王族・首長は比較的早期からイスラームを受容していたが、伝承や系譜をみるかぎり、慣習的なマレー称号や個人名をイスラーム名と併用するなど、アイデンティティとしては柔軟であった。しかし 19 世紀後半からは反植民地政府運動を反映して、それまであまり使用されなかったスールー貴族の称号ダトゥ(datu/datuk)や、巡礼経験者への尊称ハジ(haji)など、イスラーム的権威を示す称号が多用されるようになる。

王族たちとは対照的に、民衆、特に内陸部の

住民の大半は、西欧の史料によれば 19 世紀頃まで異教徒であったという。イスラーム化した後も、彼らにとってマッカ巡礼やイスラーム学校での教育はかなわず、日常レベルでかかわりを持つのは、主に宗教指導者イマムとモスクであった。20 世紀初頭までには、どのムスリム村落にも植民地政府の末端機構としてモスクとイマムの存在がみられるようになるが、いわゆる正規のイマムについては絶対数が足りないために、村長などが兼任するかたちで、民間イマムも出現する。

さらに 20 世紀以降は、上記のように近隣諸地域に多数設立されたマドラサやマッカ留学によって、イスラームは王族や地方首長層のみでなく、大衆にも急速に浸透してゆくのである。

ボルネオ北東岸における初期のイスラームとの接触・受容には、多くの場合アラブ人の存在が関わっている。彼らは布教・教育・技術移転・政策提言などを通じてイスラームの普及に貢献していた。しかしこの当時、王族や地方首長などの有力者を中心とした、サロンの受容・普及でもあったともいえる。

一般にアラブ人を介しての改宗という言説は、東南アジアのイスラーム為政者や宗教家にとって、イスラームの発祥地からの直伝であるという権威づけになる。だがここで興味深いのは、これらのアラブ人の中にはハドラマウト出身者ばかりでなく、様々な起源地や渡来目的を持つ、より以前からのアラブ人もおり、互いに競合・敵対もしていた、という点である。こうした伝承や古文書の調査が進めば、「アラブ人」をひとつの軸とした、より詳細で長いタイムスパンの地方史像を明らかにすることも可能となるかもしれない。

一方、19 世紀末以降のイスラーム主義の興隆においては、アラブ人の存在はほとんど見えなくなる。その理由としては、当地のアラブ人人口がジャワやスマトラに比して非常に少なかったことや、その頃までにアラブ人は王宮の官職や有力者たちとの通婚を通じて現地社会にかなり同化していた事が考えられる。ただし、バンジャルマシんで一般人に開放された最初のマドラサは、当初アラブ人学校として開設されたものだった、など、何らかの形でアラブ人たちの影響力が関わっていた可能性も高く、その点については今後詳しく調査する必要がある。

以上のような報告に対して、コメンテーターの新井和広氏、および参加者からいくつかの問題提起がなされた。イスラーム化における現地側の主体という要素、タリーカ(イスラーム教団)や巡礼者の役割、植民地政府との相互依存的関係などについて活発な意見交換が行われた。

特に興味深かったのは、オーラル・ヒストリアンとして自身の研究姿勢を位置づける奥島氏による、口頭伝承の取り扱いという大きなテーマをめぐる議論である。伝承の持つ文字史料とは異なる危うさに対する意識は、当然ながら必要とされる。しかし、氏によれば、文字史料が極端に不足しているボルネオ北東岸のような状況においては、伝承を可能な限り採集・分析して「近似値」とすることによって、断片的な文字史料から構築された地方史観に対しても新たな方向から光をあてることができるという。

文化人類学者の歴史認識をも問題とする氏の立場は、同じ文化人類学という視点からの研究を志す筆者にとっても示唆に富むものであった。